

『愚禿鈔』における法然教学の受容と展開

——「弘願一乗」の開頭を視座として——

藤 元 雅 文

本発表の目的は、聖道門の一乗仏教に対する厳しい批判吟味を行う法然の教学を踏まえ、その上で法然こそ「弘願の一乗」を説き弘めた方であると親鸞が讃嘆する、その内実の一端を『愚禿鈔』に聞き学んでいく所にある。

43 心的な論点は、『愚禿鈔』を親鸞の名著『教行信證』に

先行し『教行信證』を生み出す淵源として位置づけるか、『教行信證』に記される内容を受けて、師法然の教えを聞思しつづけたその内容を整理し書きとどめたと見るべきかという点である。本発表において『愚禿鈔』成立についての課題は、その指摘にのみとどめたが、『愚禿鈔』撰述の意図については、多くの先達が共に指摘するように

聞^テ賢者信^一 顯^ス愚禿心^一

賢者信^ハ 内賢^ハ 外愚也^ハ

愚禿心^ハ 内愚^ハ 外賢也^ハ

(『定親全』二・漢文篇 三頁)

という冒頭の二十四字に明示されている。

この最初の一文に記される通り、『愚禿鈔』とは、聞くべき賢者法然の信のもとに顕らかとなる愚禿親鸞の心を示した著作である。続いて親鸞が、賢者法然の信を「内賢外愚」と述べるのは、選択本願の仏道を明らかにする智慧が内に深まるほどに、ますます愚癡にかえっていく法然の信のあり方を仰いでいるのである。一方、親

『愚禿鈔』は、法然の名著『選択本願念仏集』を直接的な背景としてその内容を展開しつつ、親鸞晩年の

八十三歳という明確な識語を有する。そのために、本鈔の成立に関しては複数の見方が提示されている。その中

心的な論点は、『愚禿鈔』を親鸞の名著『教行信證』に

鸞は、師法然の信を聞けば聞くほど、愚禿の身においては「内愚外賢」つまり、内は愚かで智慧なくして、外に賢さをよそおうとする心が明らかにされるほかないことを述べるのである。このことは、親鸞にとつて賢者法然とはどのような方であり、また師法然の教えを聞思するとはいかなることかについての、重要な視点を教えている。

そもそも「本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし」とまで、自身と師との決定的な出遇いを詠う親鸞にあつて、師法然と自身との間にある差異を抉別する聞思の厳しさに私はまず注意したい。このことを曖昧にしたままで、師との出遇いの意味も、本願念仏の教えの意義も自身に明らかにすることはできないという根本的な視点の確認がここにある。賢者の信のもとに明らかになる、かつ賢者の信のごとくにはなりえない自身の心を抉るように明らかにしていく学びにおいて、選択本願に明らかになる教相と信心とを開顯する、これが『愚禿鈔』という書物の質を決定していると私は考える。

『愚禿鈔』とは、親鸞が自らの名を題目としている書である。それは、煩惱具足の身を生きる事実を徹し、その自身の「内愚外賢」の心を一点も曖昧にすることなく、その身に、「賢者の信」を聞くことを通して明らかにされた「弘願一乗」の仏道を書き記す書物として殊に愚禿の名のりを、その題号とされたと考えることができるよう。

以上のことを踏まえつつ、この冒頭の言葉に直接関係する「至誠心積」における法然教学と『愚禿鈔』との連関について考察していきたい。

善導は『観経疏』『至誠心積』の冒頭で、至誠心とは「真实心」であると定義する。従つて、法然、親鸞にとつて至誠心積は真实とは何か、或いは真实心はいかに成り立つのかという課題の究明という意義を持つ。その至誠心積の中で、殊に『愚禿鈔』冒頭の言葉と直接関係するのは

不得外現賢善精進之相内懷虚仮

という『観経疏』の言葉をどのように訓み、理解するかという問題である。これについて、法然は

「外に賢善精進の相を現じて、内には虚仮をいづく事なかれ」と。この釈のこゝろは、内にはおろかにして、外にはかしこき人とおもはれむとふるまひ、内には悪をつくりて、外には善人のよしをしめし、内には懈怠にして、外には精進の相を現するを、実ならぬこゝろとは申也。

〔おほごの太郎へ御返事〕『定親全』五・輯録篇(2)
二三三頁

と記している。更に、

外現^ニ賢善精進之相^ヲ、内懷^ニ愚悪懈怠之心^ヲ。所修行業、日夜十二時无^ニ間^ニ行^ニ之^ニ不^ニ得^ニ往生^ヲ、外頭^ニ愚悪懈怠之形^ヲ、内住^ニ賢善精進之念^ヲ、修行之者、雖^モ一時一念^ト、其行不^ニ虚^シ、必得^ニ往生^ヲ、是名^ニ至誠心^ト。

〔法語十八條〕『定親全』五・輯録篇(1) 一二六頁

と述べ、『愚禿鈔』の冒頭二十四字の表現と相応するかの

ごとき内容を、至誠心釈の理解において明示している。

以上二つの法語において、法然は、「内にはおろかにして、外にはかしこき人とおもはれむとふるま」う内愚外賢なる者は往生を得ることなく、外愚内賢の者は必ず往生できると述べ、これを至誠心と名づけるのであると言明するのである。親鸞は師法然のこれらの言葉を『西方指南抄』に書きとどめている。そうであればこそ、『愚禿鈔』冒頭の二十四字の言葉の重みはなおわれらに迫ってくる。賢者の信を前にして、徹底して聞思を重ね、そこに愚禿が心を顕らかにされながら、自らが出遇いえた仏道の内実を開顕していくその思索の営みによってこそ『愚禿鈔』は撰述されているのである。

しかも、法然における至誠心釈の理解は、「内愚外賢」にはかならない愚禿が心において至誠心釈をいかに受けとめるべきかという重要な視座をも、次のように教示している。

この至誠心はひろく定善・散善・弘願の三門にわた
り釈せり。これにつきて摠別の義あるべし。摠とい

ふは自力をもて定散等を修して往生をねがふ至誠心なり、別といふは他力に乗じて往生をねがふ至誠心なり。…中略…自力をめぐらして他力に乗ずることあきらかなるものか。

〔三部経大意〕『真聖全』四 七八七―八頁

われらは、ここに法然が善導の至誠心積の意義をいかに明らかにしていったのかという思想的な営みを直に見ることができるよう思う。憶断はさげなければならぬが、親鸞が法然門下にあつて、「真宗興隆」の仏事を目の当たりにしつつ、聞思研鑽を重ねた中には、このように法然自身の、教言にたいする聞思学修の姿をも拝見されていたということがあつたのではないだろうか。

法然が至誠心積において摠と別の二義を立て、自力の至誠心と他力の至誠心を明確に区別するのは、摠の義から別の義へ、つまり「自力をめぐらして他力に乗ずる」ことを至誠心積の真義として明らかにするためである。法然が切り開いた、このような視座の上に愚禿が心に明らかにされねばならない至誠心積の意義を独自の訓

点によって開顕したのが、親鸞であると言ふことが出来るよう。

親鸞は、真実心とは如来のなしたまう所にあり、一切衆生は如来の真実を須もちい信受するのみであるという意味で至誠心積を一貫して訓んでいく。つまり、真実における如来と衆生との分斉を峻別することを通して、自力の仏道と他力の仏道に関する教相を、二双四重と言われる形へ体系的に整理し、浄土真宗の教相判釈を『愚禿鈔』において明示するのである。

ここにあらためて思われるのは、『愚禿鈔』における法然教学の受容と展開は、親鸞一人に歩まれ確かめつづけられた、賢者の信を聞き愚禿が心を顕す聞思の厳しさとその内実の確かさによって成り立っているということである。本発表においては、『愚禿鈔』冒頭の文言の考察に終始してしまい、『愚禿鈔』における、「弘願一乗」の開頭まで、十分な考察が及ばなかった。『愚禿鈔』の教言についての詳細な考察をも含め、更なる課題としたい。

※典拠資料の略称 『定親全』(『定本親鸞聖人全集』)・『真聖全』(『真宗聖教全書』)

註

(1) 読みやすさを考慮して、原文にある漢字の読み仮名は除き、ひらがなをカタカナに変更した。

(本学講師 真宗学)

世界史における東アジアとアフリカ

——いくつかの事例から考える——

古川 哲史

本研究は筆者が現在まで取り組んできた〈日本—アフリカ関係史〉の研究を出発点に、対象地域を東アジアに広げて、近現代(とりわけ19世紀後半から20世紀)における東アジアとアフリカとの関係を、世界的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、その関係性について歴史学および歴史哲学的考察を試みる。

今回の発表では、第二次世界大戦期以降の日本、大韓民国(以下、韓国)、中華人民共和国(以下、中国)とエチオピアとの関係の事例を、関連の地図や写真(絵葉書や記念切手なども含む)とともにいくつか示した。そし

〈キーワード〉「賢者の信」と「愚禿が心」、
『選択本願念仏集』、『観経疏』「至誠心積」